

# 2009年3月期第2四半期決算 辻本会長説明要旨 (2008年11月6日)

## 1. ご挨拶

- (1) 会長の辻本です。第2四半期決算発表のシーズンを迎え、何かとご多用中のところ、本日は当社の第2四半期決算説明会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。厚くお礼申し上げます。
- (2) 第2四半期決算の業績につきましては、アミューズメント施設運営事業は苦戦したものの、家庭用ゲームソフトの好調なセールスにより、営業利益は計画を上回り、ほぼ当初予想通りに推移しました。
- (3) 私からは、今回新たに発表した「株式会社エンターライズの株式の取得（子会社化）」に関して、なぜこのような展開を行うかについてご説明させていただきます。

## 2. 子会社化の背景

- ( 1 ) 当社の事業セグメントの一つであるコンテンツエキスパンション事業の中には、P&S（パチンコ・パチスロ）事業がありますが、当該事業は1996年から受託事業として、遊技機向けソフトウェアや液晶表示基板を供給していました。
- ( 2 ) 1996年から地道な研究開発を続け着実に実績を積み上げることにより、遊技機メーカーからの信頼を得ることができ、2004年度から収益に貢献し始めました。
- ( 3 ) 一方、今回子会社化しました株式会社エンターライズは、2002年に設立し、これまでパチスロ機など遊技機の開発、設計、製造および販売を行ってまいりました。同社は規制適合機種独自の開発技術、ノウハウを有しており、それらを最大限活用するため、エンターライズ社単独で2006年より遊技機メーカー参入を計画してまいりました。
- ( 4 ) 当社は、同社のパートナー企業として、他遊技機メーカーと同様に、同社に対してパチスロ向けソフトウェアを供給することにより、受託ビジネスの拡大を計画してまいりました。

### 3. 子会社化の目的

- ( 1 ) このような背景において、当社はエンターライズ社に対してコンテンツを供給し、同社から10月にパチスロ1号機「春麗(チュンリー)にまかせチャイナ」が発売されました。
- ( 2 ) しかしながら、販売台数は当初の予想を大きく下回りました。これは、エンターライズ社のメーカーとしてのブランド力や販売戦略などの不足によるものです。
- ( 3 ) この結果、エンターライズ社は、今後の展開にあたっては安定した資本傘下に入り、先行投資等の対応を行うべきだと考え、当社に対して資本注入を打診しました。
- ( 5 ) エンターライズ社からの打診を受け、当社はその是非を検討いたしました。検討の結果、同社は当社のパートナー企業の一社であること、当社においては、受託ビジネスは遊技機メーカーの意向に左右され、事業年度における安定収益の確保が難しい状況下、業績安定化のための施策を必要としていること、両社の強みを活かした協業展開により一層の相乗効果が期待できること、などから今回の子会社化を受け入れることを決定しました。

#### 4 . 今後の戦略について

- ( 1 ) 今後の戦略につきましては、受託ビジネスと筐体ビジネスの二本立てにより、事業収益の安定化を図ってまいります。
- ( 2 ) というものの、当社にとっては新規事業であり、一朝一夕に立ち上げられるとは考えておりません。今下期は、大幅な赤字を計上しており、事業基盤の確立には一定期間を要すると考えております。
- ( 3 ) また、近年のパチスロ市場の低迷にもかかわらず、当該事業に注力することに懸念されるかもしれませんが、産業規模は大きいため、参入余地は十分にありますし、今後も筐体価格が変動する可能性はありますが、総じて利益率が高い構造に変化はないと考えております。
- ( 4 ) 当社の具体的な取り組みといたしましては、「カプコングループとして一体化した事業推進」、「開発機種の見直し」、「販売戦略の再構築」の3つとなります。
- ( 5 ) これまでは、メイン基板（当り制御）とサブ基板（映像演出部分）の開発が分離していましたが、子会社化により、パチスロ機の開発を一体化してできることとなります。今後は市場を見据えた遊技機を開発することに注力し、持続的な成長を果たしてまいります。

## 5 . 終わりに

以上をもちまして、私の説明を終わらせていただき、引き続き、第2四半期決算の具体的な内容につきましては取締役常務執行役員の阿部から、また各事業の具体的な戦略につきましては代表取締役社長の辻本より説明させていただきます。

以 上